



産経新聞の齊藤勉氏との対談です。

その難しい対応を迫られる私たちに示唆を与えてくれる本がありました。「国家の自縛」、元外交官佐藤優氏のインタビューをまとめた著作です。

まず、ロシアとの関係から見ると、ロシア人は、ふにゃふにゃした日本人を信用しないとっています。ソ連は日本社会党、日本共産党をバカにしてきました。日本人としての信条がない、という理由です。ソ連が信頼して近づいたのはむしろ自民党でも右派の中川一郎氏のような人物でした。国家を愛する者は信頼しようということなのです。よって、ロシア人から信用されたいのなら、自信をもって北方領土の言葉を語るべきなのです。しかもその言葉はパンフレットの言葉ではなく、自分自身の言葉で。いかにして北方領土が日本にとって大切なかを語ることで国家を愛する人物だという評価を得ることになります。

また、中国、韓国のことについても述べています。中韓はナショナリズムを「感情の論理」で表現していますが、これでは国際社会の評価、信用は得られません。日本はあくまで理性の言葉で語るべきです。その上で、日本はあくまで「領土問題は存在しない」という立場をとり続ける必要があります。日本がかつて北方領土交渉を進める中でソ連に対してやったことを、中国は今尖閣でやろうとしています。こちらが領土問題として認めるように挑発しているわけですが、それに乗ってはいけません。竹島については、この逆で、領土問題であることを日韓で認識することで、日本帰属への道を拓くことができます。

外交は日本の視点から見るとはならず、外からの視点で考え、動かなければなりません。周りから「変人」扱いされるような独りよがりの論理ではなく、世界の国々とうまくやっていくことで、国際社会での評価を上げるべきだと佐藤氏は語ります。外交は、米ロ、中韓しか扱わないのではなく、世界に200ある国々と付き合っていく必要があります。こうした大方針に沿った外交をしていけば、将来、日本が国連の常任理事国になる日が来るのかもしれない。

リミアの情勢などを見ると、ロシアはやっぱり実力に訴える国だ、という恐怖感を抱きます。

一方で、日本は戦後、一貫して平和主義をとり、憲法では不戦を誓っています。また、中国、韓国、ロシアともそれぞれ友好の歴史もあり、交流するとそれぞれの国民はとてもあたたかい対応をしてくれます。これらは両方とも真実であり、バランスの取れた対応をする必要があります。

被災地は今 ～岩手県を訪問しました～

日本青年会議所の会議があり、4月26～27日に、岩手県の大船渡市に行ってきました。途中、陸前高田市も通りましたが、震災から3年を経て、



だいぶ姿が変わって 総延長3kmのベルトコンベアー。きています。更地になって、かさ上げをしている沿岸の土地も見られました。陸前高田には、高台に宅地を造成する



駅のホームにバスが…。

ための「希望のかけ橋」なる巨大ベルトコンベアーが稼働しています。山を削り、その土砂を沿岸部まで運んでいます。また、気仙沼から大船渡への鉄道は、BRTというバスで復旧しています。線路敷だった土地を舗装し、専用のバスを走らせています。大船渡の湾内では、震災前と変わらず、わかめ、カキ、ホタテなどの養殖が営まれていました。土地利用の調整が済んだ地域では新しい建物が次々と建っており、各地で未来への一歩が踏み出されています。



のどかな湾内の様子。

INFORMATION

■明るい日本を創る座談会

熊谷市見晴町地区
5月27日(火)午前11:00～
岡部工務店にて
熊谷市見晴町120
→詳細は事務所までご一報ください。

■街頭演説

5月25日(日)
16:00～八木橋東口前
16:20～熊谷駅北口
16:45～埼玉りそな銀行行田支店前
17:20～羽生市中央三丁目交差点
17:50～加須市役所入口交差点
→日時は都合により変更する場合があります。